

一般社団法人日本フードサービス協会 (JF)

創立45周年記念式典・記念講演・記念パーティー

10月3日 於：オークラ東京 オークラプレステージタワー

創立45周年を迎えた一般社団法人日本フードサービス協会 (JF) は、10月3日午後2時よりオークラ東京 (The Okura Tokyo) にて記念式典を執り行い、次いでシドニー五輪競泳代表で2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会アスリート委員の萩原智子氏の記念講演を拝聴した後、午後5時半より記念パーティーを開催した。

なお記念式典・記念講演には約350名、記念パーティーには約850名の参加を得て、協会創立45周年記念事業は盛況のうちに終了した。

協会創立45周年記念式典次第

1. 開会
2. 高岡 慎一郎会長式辞

スライド上映



3. 農林水産大臣祝辞
(池山 成俊大臣官房輸出促進審議官)
4. 会長表彰 (永年在籍企業表彰)
5. 元会長挨拶
(歴代会長を代表して小嶋淳司第10代会長)
6. 閉会

JF 綱領

われわれの誓い

食とホスピタリティを通し、お客様とともに喜びを分かち合うこと、それがわれわれの原点です。

1. お客様に満足していただけるよう、ホスピタリティの向上に努めます。
2. お客様に安心していただけるよう、安全で健康的な食の提供に努めます。
3. 食と農の連携により、潤いのある食生活への貢献と内外に向けた日本の食文化の普及に努めます。
4. 地球温暖化の防止など、環境問題への積極的な取り組みに努めます。
5. 社会の一員として、雇用の創造と地域社会の発展に努めます。



高岡慎一郎 協会会長

45 年のあゆみを振り返り 新たな一步を踏み出す



日本フードサービス協会が創立 45 周年を迎えることができましたのは、ひとえに会員の皆様方のご理解、ご支援、ご協力の賜物です。同時にお客様、お取引先の皆様、農林水産省をはじめとする関係省庁の皆様方、関係者の皆様方のお力添えをいただきまして今日に至ることができました。改めて厚くお礼申し上げます。

まずはスライドで足早に協会の 45 年を振り返りたいと思います。

次に、協会創立 35 周年に策定した「JF 綱領 われわれの誓い」をお手元のプログラムでご覧ください。

この JF 綱領にあるように、外食産業の原点は「食とホスピタリティを通じ、お客様と喜びを分かち合うこと」です。同時に、業界で働く社員・従業員と喜びを分かち合うことも必要です。これらを肝に銘じ、これからもより一層、美味しく健康な食の提供、そして安全・安心の確保に努めてまいります。

日本は長寿社会ですが、健康寿命を伸ばすには「食」が重要になってきます。我が国の医療費は現在すでに約 40 兆円で、2040 年には約 70 兆円にも増大する見通しです。健康的な食の提供を追求していくことが、日本の食と生活を担う外食産業にとってますます重要な使命となります。

来年は、いよいよ東京オリンピック・パラリンピックの開催があり、さらに 2025 年には再び大阪で万博が予定されています。訪日外国人への食の提供を通じて、私たちは日本の食、日本の外食産業の国際化をさらに推進していきたいと思います。

しかし、こうしたインバウンド対応だけでなく、国際化の推進に必要なもう一方の取り組み、すなわち、アウトバウンドへの取り組みもまた重要であり、海外展開する日本の企業は増えています。

海外の日本食レストランの数は 2017 年度のデータで

11 万 8 千店とされています。今後はもっと増加すると思われる海外市場において、私たちは海外のネットワークや団体とのさらなる交流を通じて、日本食と日本食文化の普及、ならびに国産食材・食品の輸出促進に努めたいと思います。

また、外食産業にとっては、食材を供給してくださる生産者やお取引先をはじめとする、あらゆるパートナーとの「信頼」が大切です。私たちは互いに連携しながら固い絆で結ばれるよう努力をしていきたいと思います。

私たち外食産業は「ピープルビジネス」としてお客様へ最高のサービスを提供することが目標です。そのためには、深刻な人手不足の中ではありますが、社員、従業員に意欲を持って生き生きと働いてもらうことが大切です。外食業界でも IT 化は進んでいますが、もっと重要なのは人を磨き上げることです。

昨今、SDGs（持続可能な開発目標）があちこちで取り上げられていますが、外食産業の目標も「パートナーシップの構築」、「すべての人に健康と福祉を望むピープルビジネス」、「働き甲斐のある経済活動」など、類似点が多いのではないかと思います。

協会創立後 45 年も経ちますと、世代交代で次世代の若い経営者が誕生したり、あるいは新しい業態の外食ビジネスを立ち上げる経営者が出てきたりと、外食産業をめぐる状況も変化しておりますが、しかし何と言っても、日本の外食産業がここまで成長し、本日このような日を迎えることができたのも、諸先輩方の献身的な努力があったからです。

本日出席の皆様、ならびに関係者の皆様には、45 年にわたるご支援ご協力に感謝申し上げますとともに、今後一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、会員の方々のさらなるご発展を祈念して式辞とさせていただきます。

農林水産大臣祝辞

大臣官房輸出促進審議官
池山 成俊 氏

本日、江藤農林水産大臣による御挨拶の予定でしたが、急な公務により代わりに私の方から御挨拶させていただきます。江藤大臣からはこの後の記念パーティにて御挨拶させていただく予定です。

あらためまして、一般社団法人日本フードサービス協会の創立45周年記念式典の開催に当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

まずは、高岡会長をはじめ、皆様におかれましては、この度、創立45周年を迎えられたことに対し、心よりお慶び申し上げます。

45年前の1970年代は、多くのファーストフードやファミリーレストランが日本に登場した時期であり、以降、本協会関係の皆様方は、長きにわたって外食産業の成長をサポートしてられました。

また、外食産業は、今や単に食を提供するだけでなく、健康長寿や食育、コミュニケーションの場など様々な価値を消費者に提供しており、消費者の多様なニーズに対応した皆様の取り組みに敬意を表する次第です。

一方で、外食産業をめぐる状況を見てみますと、深刻

な労働力不足や働き方改革など、様々な課題があると承知しております。

そのような中、政府は2030年までに日本の総人口の約半分に当たる6000万人まで外国人旅行者を増やすことを目標に、取り組みを進めています。2018年時点で、3000万人を超す訪日外国人旅行者による飲食消費額は約1兆円であり、このインバウンド需要の取り込みに向けた対応を進めることは、ますます重要になっております。

また、外食産業でも外国人労働者への門戸が拡大しております。世界的に人材獲得競争が進む中で、外国人労働者を単に人手不足の穴埋めとするのではなく、海外展開やインバウンド対応など、今後の積極的な事業戦略に活用し、更なる成長を目指していただくことを御期待申し上げます。

外食産業は、農林水産物の供給先として、我が国の農林水産業にとっても欠かせない存在です。農林水産省としても、両産業が、持続可能な成長を続ける産業となるよう、皆様との連携をより一層深め、取り組んでまいります。皆様の引き続きの御協力をお願いします。

5年後には貴協会も創立半世紀の節目の年を迎えます。次の50周年に向けて、貴協会及び外食産業がより一層の発展を遂げられることを期待するとともに、本日御列席の皆様方のますますの御健勝を心から祈念申し上げまして、私のお祝いの挨拶といたします。

歴代会長代表挨拶

第10代会長
小嶋 淳司 氏

平成13年5月から同15年5月までの2年間、第10代会長として、食を通じて人びとの生活に貢献するために協会が一致団結し、わが国の外食産業の発展に寄与するという、JF発足時から引き継がれてきた理念の実現を目標に、会員の皆様と共に走ってまいりました。横浜で開催した「食の祭典ジャパンフードサービスショー

(JFショー)」など楽しい思い出もありますが、日本初のBSE発生により直面し、業界を挙げて厳しい状況にも立ち向かいました。

今、消費増税、深刻な人手不足、働き方改革など新たな課題が山積する一方で、目白押しの国際的イベント等で外食産業には多くのビジネスチャンスもあると思われます。第四次産業革命と言われるこの変革期に、IoTとAIでさらに加速が進むデジタル社会に対応していくためには、JFをプラットフォームとしたオープンイノベーションが求められています。創立以来の理念に基づき、業界が一致団結して取り組み、これからの未来を一層明るく元気なものにしていきたいと思います。

会長表彰

協会会員として20年以上在籍し、前回の40周年記念式典までに受賞していない正会員・賛助会員に感謝の記念品が贈呈された。



協会会長表彰受賞企業（五十音順）

【正会員】

株式会社アグネス
株式会社安楽亭
株式会社歌行燈
株式会社音羽
有限会社片山商店
クレバー物産株式会社
株式会社幸楽苑ホールディングス
株式会社小嶋屋
株式会社コロワイド
さつま麺業株式会社
株式会社三栄本社
株式会社J Bイレブン
株式会社ジャパンフーズコーポレーション
株式会社ゼンショク
千房株式会社
チムニー株式会社
東和フードサービス株式会社
株式会社につぱん
株式会社ハークスレイ
株式会社半田屋
株式会社ピアサーティー
ヒッコリー株式会社
株式会社ファイブスター
株式会社福しん
株式会社フジオフードシステム
株式会社フレッシュネス
株式会社プロントコーポレーション
株式会社 MYU
株式会社モンテローザ
株式会社ラムラ
和幸商事株式会社
株式会社ワンダーテーブル

【賛助会員】

石光商事株式会社
株式会社伊藤園
クマリフト株式会社
サントリービバレッジソリューション株式会社
株式会社J - オイルミルズ
株式会社昭和化成
株式会社 SEB Professional
大日本印刷株式会社
タカナシ販売株式会社
東京サラヤ株式会社
株式会社日本アクセス
ハウス食品株式会社
株式会社パシフィック湘南
不二製油株式会社
株式会社マキシム
ヤマダイ食品株式会社



協会会員在籍20年以上の受賞企業48社を代表して高岡会長より記念品を受け取る林祥隆(株)ワンダーテーブル代表取締役会長



受章者を代表して「新たなパラダイムシフトの中で外食産業はますます重責を担うことになると思うが、皆様方とともに切磋琢磨してその一翼を担っていきたい」と挨拶をするワンダーテーブルの林祥隆代表取締役会長

記念講演

日本水泳連盟理事 萩原智子氏

トビウオジャパン 強さの秘密



● きっかけは 1996 年のアトランタ五輪…

競泳日本代表が今のように強くなったのはなぜなのか。それは 1996 年のアトランタ五輪でメダルを取れなかったことがきっかけだ。アトランタ五輪の代表選手は史上最強と言われていたのに惨敗した。

この結果を受けて日本水泳連盟の古橋広之進先生は大きな改革に乗り出し、まず、ヘッドコーチを学校経験者から登用することにした。若い日本代表には人間力の向上のためにも教育が必要だと考えられたからである。そこで教育経験のある上野広治先生がヘッドコーチに**ばってき**抜擢された。

古橋、上野両先生が指摘されたのは、「競泳は個人種目であるが、一人で戦い抜くには限界があるのも事実であり、チームとして同じ方向に向かって戦っていくことが必要だ」ということだった。個人競技なのに、ライバル選手に手の内を明かして、チームのために献身を求めると批判する指導者もいたが、上野先生は次のような改革を一つ一つ実現していった。

● 三つの改革…

第一は「心を一つに」すること。私も代表として召集されたのだが、次の日に早速「全員が揃うようにして 50 メートルを泳いでみろ」と指示された。何のためにこんなことをするのか、私には理解できなかった。10 本以上泳いでも揃わなかったとき、ある先輩が「いくらやっても終わらないから、皆で分析しよう」と声をかけてくれた。すると、それまでバラバラだった皆が、一つの目標のために取り組み始め、練習が終わる頃には先輩・後輩の壁が取り払われていた。また、それぞれのキャラクターや居場所が確立され、各自がどのような形でチームに貢献していけるのか、自分なりに把握できるようになった。このような試みは今も継続しており、かつては選手のみでやっていたものを、今は監督、コーチ、トレーナー、栄

養士など、チームに関わる皆で作りがあげている。

第二に「オープンマインド」になること。かつての日本代表は、背泳ぎなら背泳ぎを、各自が所属する指導者に付いてマンツーマンで練習していたため、指導者から「自分の選手のために作ったメニューをなぜライバル選手に開示しなければならないのか」という反発もあった。だが、古橋先生は「チーム全体が一丸となって強くなり、世界と戦うのだ」と説得し続けた。選手の立場から見ても、ライバルたちと練習することで必然的に力が出て、練習の質も上がる。私も、ある時ライバルのコーチの練習法を取り入れたところ、背泳ぎで長年悩んでいた水の「キャッチ」の感覚を掴むことができた。そういうことがあり、選手側からも、一緒に練習したいという思いが強くなっていった。

そして最後は「チームのために」。五輪競泳二冠の北島康介さんの泳ぎを見たい、知りたいと思う人は大勢いるはずだが、当初、練習は公開されていなかった。しかし、上野先生はその映像の公開に踏み切った。北島さんも「みんなのためなら喜んで公開します」と快諾してくれた。今は水泳連盟に各試合のデータバンクがあり、全国各地の小学生から成人までのあらゆる選手が、その分析されたデータを見られるようになっている。所属の壁を超えることにより、選手にとってのメリットが段々と見えてきた。「チームのために」とは、すなわち「情報の共有」を意味するのだと思う。

● 改革が花開いたアテネ五輪以降…

チームの結束力の強さを示すエピソードとして「水着の自由化問題」がある。それまでは、大会ごとに水着メーカー 3 社のうちのいずれか 1 社が担当することになっており、全選手がその社の水着を着用しなければならなかった。水着にも選手それぞれ相性があったので、自分にしっくりこない水着で試合に臨まなければならない大会もあった。それを「自由化してほしい」と先輩の千葉すず

さんが発言してくださり、上野先生も了承して自らが各社に回り何度も頭を下げてくださいました。

2004年のアテネ五輪では、「チームのために」という情報の共有が見事に活かされた。初めて屋外で開催された大会で、スタート台は直射日光を浴びて熱くなっている。一番手で出場した選手は、その熱さに動揺して予選落ちしてしまった。だが落胆しながらも、後続の日本選手を追いかけ行って、「スタート台が熱いから気を付けて」と声をかけた。自分の結果が思わしくなくとも、ライバルであるにも拘らずチームのためを思い、情報を共有する心の広さを見せた。そのようなこともあり、アテネでは複数のメダルを獲得することができた。

メダルを取れる選手は一握りであり、取れなかった選手のほうがはるかに多い。昔はメダリストとそうでない人との間には徐々に溝ができ、食事の時も離れていた。しかしメダルを取れなかった人がチームに貢献できるようになったことで、徐々にその溝が埋まっていった。メダルを取れなかった選手がチームに貢献した例はほかにもある。アテネ五輪で銅メダルを獲得した背泳ぎの森田智己さんは、北京五輪では残念ながら決勝に残れなかった。私はマスコミの一人として取材をしていたが、腰を痛めて関係者に支えられるようにして引き上げていく森田さんに声をかけられなかった。しかし翌朝、彼はチームの荷物を抱えながら誰よりも早く現れ、我々に挨拶し、率先して手伝いをしていた。「僕にできることはこれしかないから、落ち込んでいたらチームの雰囲気も悪くなるし、できることをやりたい」と言っていた。競泳日本代表はいつしか、とても大人なチームへと成長していたのだ。

2012年のロンドン五輪では戦後最多となる11個のメダルを獲得した。「(北島) 康介さんを手ぶらで帰らせるわけにはいかない」と、男子400mメドレーリレーでも銀メダルを取った。チーム力を体現した選手がいなければ、ここまで力は上がらなかっただろう。

北島さんは2000年シドニー五輪の100m平泳ぎで私と同じく4位に終わり、200m平泳ぎでは予選落ちしたが、落ち込んでいた私とは対照的に、「僕は2008年に金メダルを取る」と言った。すでに2大会先のことを見据えていたのだ。そして実際、彼は2004年のアテネと2008年の北京でそれぞれ2つの金メダルを獲得し、世界新記録も出した。

私は30歳になるまで4位に終わったことをコンプレックスに思っていた。最後の日本代表で北島さんと再会し、

そのことを話すと、「智子さんは十分に頑張っている。自分を褒めてあげて」と励ましてくれた。「私は今まで、負けた自分、駄目な自分を追いかけてきたのだ」と気づき、彼の言葉により、それが洗い流された気がした。トップアスリートには余裕からくる優しさと強さが備わっている。その背中を見て育った後輩は、チーム力を認識してより強くなっていく。

競泳は、結果がものをいう世界ではあるが、一方で積み重ねられてきた過程もまた残る。今でも4位に終わった時のことが夢に出てくるが、今はそれを前向きに受け止めて、自らが経験したことを後輩に伝えていくのが私の役目だと思っている。

リオデジャネイロ五輪には日本代表の精神的支柱だった北島さんは出場しなかった。代表選考の日に調子が悪ければ落ちてしまう一発勝負の世界だ。リオ五輪では半数以上の選手が初出場であったため、北島さんや岩崎恭子さん、柴田亜衣さんなど、これまでの金メダリストの方たちに、成功も失敗もすべて含め、あらゆる経験を講義してもらったところ、代表選手たちは「先輩たちが何度も話してくれるので、もう五輪に3回くらい出ているような気になってきた」との感想を述べた。「生きた情報の共有、縦横のつながり」の大切さを再認識した大会だった。

● オールジャパンで臨む東京大会…

いよいよ東京オリンピック・パラリンピックが来年に迫ってきた。瀬戸大也選手は代表第一号に内定後、すぐに渡米し合宿に入った。池江璃花子さんはリオで五輪初出場を果たし、これまで日本代表を引っ張ってきたが、突然の白血病で代表チームも大きな衝撃を受けた。彼女は今、前向きに病と闘い、治療に専念している。皆さまにもぜひ回復を願っていただければと思う。

水泳代表は、オリンピックとパラリンピックの双方が一緒になって練習をしている。パラリンピック代表選手のバランスをとって綺麗に泳ぐ姿は、驚きとともに参考にすべき点が多々ある。逆に、オリンピック代表の泳ぎがパラリンピックの代表選手たちにとって参考になることもあるだろう。「オールジャパン」で、お互いに相乗効果を生み出すことができているのを感じる。

来年の東京大会に向けて選手たちは常に全力で頑張っている。競技の結果の如何にかかわらず、彼らを拍手で迎えてあげてほしい。

記念パーティー 来賓挨拶



農林水産大臣
江藤 拓 氏

創立45周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。この45年間で、女性がどんどん社会進出し、また、単身世帯や高齢者世帯が増加する中で、家庭で調理する人が減り、外食に対するニーズは増大・多様化してきました。皆様はこのような社会構造の変化に適切に対応し、かつて家業中心であった外食を産業として発展させ、市場規模を3倍にまで拡大させてされました。また、その過程において様々な業態やメニューの開発を

行い、国民の需要に応えるとともに、国産農林水産物の活用にも取り組んでされました。改めて、皆様のこれまでの取り組みに敬意を表します。

さて、昨年の訪日外国人旅行者は3,000万人を突破し、その飲食費は約1兆円にも及びます。来年のオリンピック・パラリンピック東京大会や、2025年の大阪・関西万博と、世界的なイベントが続く中で、この消費額はさらに増大することが見込まれます。このチャンスを活かして、訪日外国人の方々に我が国の外食産業の素晴らしさをアピールしていただくことを期待します。

貴協会が45周年を機にさらに結束を強め、業界のますますの発展のために尽力されることをお願い申し上げますとともに、皆様方の御健勝と御発展を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。



JF 歴代会長の登壇 (右) 島村宜伸元農林水産大臣・JRO 会長の音頭で乾杯する来賓の方々と歴代会長



栗田貴也協会副会長の中締めで記念パーティーは盛況のうちに幕を閉じた

JF 創立45周年記念パーティーは、正会員、賛助会員、招待者等、合わせて約850名の出席を得た



厚生労働大臣
加藤 勝信 氏

いよいよ来年6月から、食品衛生管理の世界基準となっているHACCPが施行されます。海外から来られる多くの人たちに、安全で多様な日本の食文化を満喫していただくために、外食産業の皆様方には中核となって頑張りたいと思います。厚生労働行政においても、しっかりと実現させていきたいと思います。

5年後の50周年、さらにその先に向けてのご発展を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



国土交通大臣
赤羽 一嘉 氏

日本初のBSEが発生したとき、JFの皆様と共に難局を切り開く対策と風評被害の対策にあたり、しっかりと撲滅できたことを心から感謝しております。

今年からの外国人材受け入れの新しい試みでは、皆様方にご苦勞をおかけしていますが、少しずつでも成功事例を作って、人手不足問題の解決の一助とされることを願っております。

JFの皆様方の益々のご発展を心から祈念申し上げ、お祝いのご挨拶とさせていただきます。



東京オリンピック・パラリンピック担当大臣・女性活躍担当大臣
橋本聖子氏

JF 創立 45 周年、おめでとうございます。東京五輪担当大臣として、大きな課題である感染症、輸送の問題などがすべて円滑に進むと、食文化を守っていく、発信していく上で大きな力にもなりうると思っています。

東京の選手村では初めての試みとして、選手村のダイニングとは別のエリアに日本食文化だけを提供するエリアを作り、日本の食文化を新たなレガシーにして行きたいと思っています。



自由民主党税制調査会長
甘利 明 氏

いつも思うことは、日本の外食産業の心意気の高さであります。チェーン各店で本当にばらつきがないクオリティの高さ、そして昨今は食のみではなく、コト消費を楽しむことができるように充実されていると思います。日本の外食産業、JF がさらに、観光立国の中核として繁栄されますよう、心からご祈念を申し上げます。



公明党副代表
井上 義久 氏

私の議員生活の 30 年、様々な形で JF の皆様と一緒に仕事をさせていただきました。今日の外食産業の発展を支えられた皆様方に心から敬意を表します。東日本大震災のとき、食の力をまざまざと実感しました。皆様には、国民の生きる力を支える存在であっていただきたいと思います。本日は本当におめでとうございます。



元農林水産大臣・JRO 会長
島村 宜伸 氏

日本フードサービス協会の創立 45 周年式典が盛況のうちに無事終了したことをお慶び申し上げます。JF はたいへん大きな組織になりました。高岡会長をはじめ登壇しておられる歴代の会長は、ご自分のことを投げ打って業界のために取り組んでこられました。改めて敬意を表します。それでは、皆様のご健勝を祈念して、乾杯！